

自分のもとへ引き寄せよう

——トマス・クランマーの殉教

ヨハネ 12 : 32



司祭 ヨハネ 井田 泉

2018年3月18日

大齋節第5主日

奈良基督教会にて

「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」ヨハネ 12:32

今日のヨハネ福音書によれば、主イエスは弟子たちとの別れが迫ったとき、このように言われました。

その言葉のとおり主イエスのもとに引き寄せられたひとりの人のことを、今日はお話しします。それは 16 世紀、今からおよそ 500 年前に、聖公会という教会の土台を築いたトマス・克蘭マーという大主教です。

祈禱書の 12 頁を開いてみましょう。教会暦の小祝日です。

「3 月 21 日 主教トマス・克蘭マー (1556 年カンタベリー)」と書いてあります。今週水曜日 3 月 21 日は、トマス・克蘭マーの殉教の日です。彼は、16 世紀、第 69 代カンタベリー大主教として英国の宗教改革を推進しました。克蘭マーの働きと死があって、聖公会の信仰はわたしたちのところまで継承されてきました。彼について三つのこととお話したいと思います。

1 トマス・克蘭マーは祈禱書を編集し、発行しました (1549、1552)。それまでの礼拝はラテン語で行われており、一般の人には何が語られ祈られているのか理解することができませんでした。礼拝は、参加者それぞれが自分のわかる言葉で、

まごころからささげるはずのものです。彼が編集した英語の祈祷書によって、一部の聖職者だけではなく、一般の信徒が身近に祈りの書を用いて信仰生活を深めて行けるようになりました。祈祷書の制定にひとつの結実を見るイングランドの宗教改革は、ヘンリー8世、そして特にエドワード6世の時期に進められたものです。

克蘭マーが書いた最初の祈祷書（1549）への序文には、このように記されています。

「このイングランドの教会では、長年、礼拝がラテン語で読まれてきた。そのため会衆は理解できない。ただ耳で聞くだけで、彼らの心も霊も精神も、それによって教えられ養われることがなかった。」

礼拝を、皆がわかるものにしなければならない。聞いて理解して、わたしたちの心と霊と精神が慰められ、養われて、愛に燃えるものとなるべきだ、と克蘭マーは考えました。そのために新しく用意されたのが祈祷書なのです。

祈祷書にはおびただしい聖書の言葉がちりばめられており、人々は祈祷書によって聖書の言葉に触れることができるようになったのです。また彼は聖書日課を定めて、皆が聖書にできるだけ触れていけるように工夫しました。たとえば150ある詩編全体を

毎月1回唱えられるように割り振りました。今から40年ほど前、わたしが神学生だった頃、神学校では朝夕の礼拝をとおして、たしかに毎月詩編全体を唱えるようになっていました。忠実に実行すれば、1年間に12回、詩編全体を読むことになります。

2 ところが、祈祷書が発行されてまもない1553年、英国王エドワードが亡くなり、彼の姉にあたるメアリーが女王に即位しました。メアリーは宗教改革を憎み、改革路線を否定して教会のカトリック復帰を進め、改革を進めた者たちを迫害しました。宗教改革の中心的指導者であった克蘭マー大主教は聖職位を剥奪され（Degradation）、彼が進めた改革路線が誤りであったことを認めるように迫られました。彼は脅迫に屈して、自分がこれまで進めてきた道が誤りであったとする転向声明文を書いて署名しました。しかし彼は赦されず、火刑に処せられることが決定されました。

克蘭マーが死刑となる前の日、彼は召し使いの少女にコインを渡してこう頼んだそうです。

「わたしのために祈ってほしい。悪い司祭の祈りよりも、善き信徒の祈りのほうが大切だとわたしは思う」。

3 メアリーが即位して3年後の1556年3月21日、今から

459 年前の昨日、衆人環視の中で彼を火刑にする儀式が行われました。クランマーの大罪を弾劾する説教が行われました。クランマーは自分の重い罪を認め、刑に服する言葉を述べるはずでした。ところが、彼は突然予定されていなかったことを語り始めました。

「自分は死の恐怖のために、自分の良心に反してカトリックへの転向声明文を書いたのだ」。

怒号と興奮の中で彼は語りつづけました。彼は鎖で柱に縛り付けられ、火が付けられました。

彼は燃える火の真ん中に自分の右手を突っ込んで、叫びました。

「恥ずべき右手、この手が罪を犯した」

カトリック転向に署名したその手です。その右手が、自分の不真実そのものを現していたのです。

そして最後は、あの最初の殉教者ステパノと同じように、  
「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」（使徒言行録 7：59）と祈り、



「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」

(7:56) と言いつつ、死んでいったといわれます。

焼かれて灰となった彼の身体の中で、心臓だけは焼けていなかったと伝えられます。心臓はハートです。彼を滅ぼそうとした火も、彼の魂を滅ぼすことはできなかったのです。

このトマス・克蘭マーの祈りと働きと殉教の死があって、聖公会という教会が形成され、今日のわたしたちに至ったのです。

トマス・克蘭マーを記憶し、その信仰を継承したいと願います。三つのことを呼びかけたい。

**第一に、祈禱書と聖書を大切にしましょう。**わたしたちの祈禱書は、克蘭マーの祈禱書が元になり、改訂が重ねられて作られたものです。祈禱書には、だれもがよく祈り、神を知り、信仰を深めることができるようにと願った克蘭マーの切なる願いがこめられています。祈禱書を活用して自分の信仰の養いとすること、一緒に祈ることを大切にすること。克蘭マーが人々の信仰の成長を願い、その助けとなろうとしたように、わたしたちも他の人の信仰の助けとなることができますように。

**第二に、真実に神に立ち返りましょう。** クランマーは信念を貫徹した殉教者というのではなく、恐れ、迷い、転向を誓うなど、人としての弱さを持った人間でした。けれども彼の良心はうずいて、最後に真実を叫んで死んでいきました。わたしたちも弱く、過ちを重ねるかもしれません。けれども良心の痛む者でありたいと思います。そしてほんとうに大切なときに、はっきりと信仰を表わすことができますように。

**第三に、決意して主を呼びましょう。** 「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と、ステパノが殉教したときの祈りをクランマーも祈りました。わたしの霊は主のもの。主イエスは呼び求めるわたしたちを放置なさいません。わたしの心を、わたしの魂をご自身のものとして引き受けてくださいます。

**「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」 ヨハネ 12:32**

このように言われた主イエスは、最後のときに、クランマーをご自身もとに引き寄せられたのです。

主イエスよ、信仰弱いわたしたちを、みもとに引き寄せてください。苦難の十字架の上から、祝福の源である十字架から、わたしたちを引き寄せてください。アーメン